

哲学の話

まつやに。

よう、お前と俺は今日もカップラーメンか。また今月はなんでお金が無いのよ？ 漫画？
ああ、黒鉄戦騎グロウランスの7巻の事か。あれ俺も見なかったわー。あとで貸してくれねえ？
よし、じゃあ後で借りるということで。
そうそう、俺さお前に面白い話を持ってきたんだよ。哲学の話なんだけど俺でもあーってどこか納得出来るっていうかなんつうか。まああの女が絡んでるところにどこかイラつくがな。あ？
ああ、翔子だよ、翔子。この前いきなり哲学のお話しましょなんて言ってきてどうせロクなものじゃねえとか思ってただけだなー、蓋を開けてみたらなるほどねっていう。
おうおう、お前も興味でてきただろ！ じゃあ俺が翔子に話しかけられた所から話すか。
これは数日前の話だー。

「いま暇かしら？」

急に声をかけられた。それも嫌な奴に

萩原翔子。俺の幼なじみ。身長は俺より少し低くボンキュッボンとまではいかないがそれなりにスタイルは良く、スラリとした長い黒髪が特徴的でボサボサの寝ぐせ丸出し天然パーマの俺とは大違いだ。認めたくないが翔子にはそれなりにファンが居るらしい。そのお陰なのか翔子ファンの奴らから痛い視線攻撃をよく受ける。

スタイル良くて黒髪ロングで顔立ちも整ってる。典型的な美少女ランクに位置付けされる翔子。だが、俺はダメされない。小中高と接してきた俺には分かる。奴の裏側は皆が想像する斜め下を行っているということ。

「ねえ？ 私はあなたとお話がしたいんだけど」

多少の苛立ちをふまえて俺は翔子に言われた。コイツの苛立ちは顔に出るといふか雰囲気に出るといふかなんというか。幼馴染の俺にとってはコイツの苛立ちなんぞ手に取るように分かる。だが、こいつかイライラしようが何だろうが所詮俺に実害はな——い？

スコン、と小さな破壊音の後、テーブルに置いた俺の掌、人差し指と中指の間に銀のフォークが突き刺さっていた。自然現象でこんな事起こるはずがない。ならば犯人は分かっている。

「おいコラァ！ もう少ししたら俺の人差し指君か中指君がポックリ逝っちゃう所だったじゃねえか！ 根元からザックリだぞ？ 箸やらペンやらが何一つ持てなくなっちゃう。そしたらお前に責任とってもらうからな。朝から晩まで俺に飯をハイあーんのお決まりフレーズで食べさせるよ！ ……ってんな事したら俺が病人みてえじゃねえか！？」

「心配しないで当てるつもりはなかったわ。少なくとも中指には」

「中指にはってなんだよ！？ 人差し指には当てるつもりだったのかよ！」

ここまでの怒鳴り声を上げると普通ならば大衆から奇異の視線を浴びせられるっ……、とりあえず落ち着け俺。深呼吸をして冷静になれば頭も働く……………落ち着いた。

「……で？ 今日は何のようですか。我が校の美少女姫様のワガママはもう聞き飽きました。平々凡々たる私はあなた様には似合いません。だから俺の割り箸弄ってねえでさっさとどっか行って下さいお願いします」

コイツはペン回しの様に遊んでいた割り箸をテーブルに置いて俺に微笑みかける。その微笑みは他の馬鹿共は天使のように、俺には悪魔に見える。まずは皆はこの女に騙されている。こいつは皆が思ってるほど慈愛の心を持ち合わせていないし、さっきの人差し指切断未遂事件を見てわかったと思うがこいつは俺が困れば困るほど面白いだけの嫌な女。

そして俺がこの世で最も苦手とする女。

「その発言は褒め言葉として受けたいところだけどあなたから言われると皮肉と嫌味にしか聞こえないのだけれどそれは私の勘違いかしら？」

「ええ、ただの勘違いですよお姫様」

「それならよかったわ」

そしてカップラーメンを自分の近くに持っていく翔子。割り箸とカップラーメンが敵陣の中央にある。これから想定される事はひとつ。まさか……。

「ちっとまってくれ。お前は俺の今日のお昼をどうする気だ？ まさか勝手に食う気じゃなからうな。そうなら俺はたった一人でお前に対してテロ行為を行うがよろしいか？」

「目標に向かってテロを仕掛けますって許可を取るテロリストはどこにもいないと思うわ。安心して奪ってまで食べる気はゼロ。それに私はもうお昼を済ませたの。食堂のヘルシー定食500円。あなたも食べてみたら？ 新鮮な野菜が美味しいわよ？ 今日のはトマトが特に瑞々しかったわ」

「そんなお金はもってねえ。俺の財布の中身は現在二〇七円」

「かわいそうに。私には同情と卑下の視線で見つめることしかできないわ」

「俺を凝視一秒毎に俺の財布へ二〇〇円の寄付があるならされても我慢しよう。てかお前俺に話があったんじゃないのか？」

「そうだったかしら？ えっと……」

こいつは鳥頭じゃないのか？。なぜ、自分から吹っ掛けたことを記憶からすぐに消すという蛮行ができるんだ。しかし成績は良い。世の中不条理な事だらけだ。俺が必死こいて勉強をするがこいつは教科書パラ読みして授業をしっかりと受けてるだけで上位は狙えるらしい。

確かに間違えたことは言っていない。むしろ正論。

正論だからこそ立ち向かう事のできないモノに対して最後の最後まで足掻こうとする。それがコイツの興味をそそる。悪循環だなと常々おもうよ。

「思い出した。あなたと一つ今日のお昼休みを使って対談をしたかったのよ。あなたの腐り腐った脳みそを多少なりとも瑞々しさを取り戻す為のね。昔のあなたは純粋な男の子で毎日毎日翔

子ちゃん翔子ちゃんと私にくっついて歩いてはその日の出来事を包み隠さず話してくれたのに。どうしたらこんなに漫画やゲームにへばり付く様になったのか。私が一番知りたいわ。私は特にあなたに悪影響を与えるような事はしていない。ならば周りの環境が悪かった。まず根本的になんで私があなたのことをここまで心配しているか、それはあなたのお母さんに頼まれたからと私があなたの幼馴染という妙な縁の所為。この事に関して心の底から感謝の意を示すがいいわ」

ここまでの長いしゃべりのどこで息継ぎをしているのか。俺はコイツの生体を知りたい。もしかしたらコイツは人間という哺乳類ではなくて、どこかでエラ呼吸をしているのではないだろうか？ ならばコイツは人間の形をした魚類か両生類ということになる。

いや？ それは俺が不覚考えすぎなのか？ 俺が感じ取れなかっただけでどこかで呼吸をしていたのかもしれない。そういう事にしておこう。そう考えないと俺の中でコイツは人間以外の生命体に確定しちゃう。

「長ったらしい説教はいい！ 結局は何の話をしたんだよ！」

「哲学」

「丁重にお断りする」

「逃がさない」

「逃がせ。そして俺の肩に乗せた手を離せ。俺のカップラーメンを返せ。俺の今までの時間を返せ。俺のお前に費やした時間を返せ。そしてカエレ」

「大丈夫。今まで費やした時間とラーメンを価値を2倍した位のいい話を聞かせてあげるわ」

「時間とラーメンの価値はそこまで高くないため底辺。底辺達の2倍などたかが知れとる。無慈悲に捨てろ」

「あなたが生み出した価値なら最後まで面倒見なさい」

だが昼飯が無くなっては大切な栄養分とその他もろもろが流出する恐れがあるため嫌々ながら聞くハメに。いや、コイツに話があると持ちかけられた時点で逃げ出すかなにか手を打っていた方がよかった。結局どう文句を並べようが罵声を浴びせようが話を聞くという事は確実に起こるとい事が決まっていた。なぜそのような予想ができるか？ 人間というものは長く親しく付き合っているものとは科学的に証明できない第六感というもので相手の考えが読める時がある。コイツに話しかけられた時点で俺の心の鐘は轟音を打ち鳴らしていたんだよ。

「まず哲学の話ってなんだよ。あれか？ 古代のドエライ科学者様やら偉人を並べ立ててそもそも哲学というのは.....のセリフから始まって気づいた時には外はもう真っ暗で長時間話し込んでましたっていうオチですか。そんな漫画みたいな展開は面白くもなんとも無い迷惑極まりない出来事ということで一つ今回の事は無しにしましょう。ということでラーメン返してください」

「そんなに捲し立てられても私には何の効果は無いから期待しないで。長い付き合いの中で学習しなかったの？ 大丈夫、あなたの心配している科学者も偉人も出なければ気づけばお外が真っ暗なんて事はないわそこは期待して」

「俺のお先は真っ暗な事は期待しとけ」

本当にコイツと話していると調子が狂う。俺は人間にはそれぞれに自分のペースというものがあると思うんだ。例えばランニングをしていたら後ろから抜かれた。そこで大抵の人間は自分のペースを崩してまで相手を抜こうとするだろ？ つまり翔子は自分のペースを崩さずに相手のペースを崩す天才なんだよ。

崩されたら最後流れに身をまかせるしか無い。たとえそれが望まぬ結果であろうともな。

「それじゃあ本題に入るけど……。あなたは哲学はどんな物だと思ってる？ 難しい勉強とか話だと思ってる？ それともエッチな物だと思ってる？」

「とりあえず最後のは聞かなかったことにして馬鹿にはあまり馴染みのないものだと思ってるよ、哲学つつうのは。ラノベとか漫画とかによく出てきて題材にされるのは見るけど、それくらいだな。俺が持ってる哲学の知識っていうのは。一度大きく興味を持ったことはあるけど書店でそれっぽい本をあさってはワケわからんおっさんやらなんやらが出てきてこりゃ駄目だと悟ったよ。俺にゃあ理解できん。あんなベリーハード級のもん」

まず、哲学でエロいってなんだよ。ロリは哲学とか言ってる奴らを見るがそういうものか。

「あなたが興味もったキッカケってなに？」

「んー、なんだったかな。よく覚えてないけど漫画とかからだったと思うぞ。……アニメや漫画から興味をもつのはダメですか」

確かその時読んでた漫画は探偵ものだったはずだな。主人公が犯人とチェスで勝負するんだけどその時の会話に哲学っていうキーワードが大量に出てたからじゃなかったか。我ながらそういういらねえ事ばかり記憶しやがって。

「いいえ、むしろそっちの方がやりやすいというか話しやすい？ とにかく何でもそうだけど興味をもつのは何処からでもいいしどういう経路をたどろうがどうでもいいのよ。結局は同じところに辿り着くんだから。例えばとあるバンドの曲を聞いていてこの曲知ってると言われて聞いてみると全然知らないの。けどその曲を好きにならなかつたらそのバンドのファンじゃないとか言われる。人によってモノに興味をもつ順路、今の例えだったら好きになった曲は違うけど最終的にはそのバンドを好きになる。同じモノを好きになるまでの過程をそこまで重要視する人はどうかと思うわね。実際のところ私は最終的にたどり着いた所でどう振舞うかが大切だと思うの」

なるほどね。非常に解り易い。

「お前の言いたい事はわかったよ。で？ それがどう、哲学と関係性があるのか説明して欲しい。俺は漫画から一度興味持った事がどう哲学になるんだ」

「そうね、知的好奇心の逆算ってとこかしら」

逆走？ なんだそれはと問いたくなかったがとりあえず翔子が続きを話すまで黙っておくことにした。

「物事の繋がりを遡る事も哲学につながる一つだと考えているの。いいえ、もしかしたらその知的探求こそが哲学なのかもしれない。あなたが爪を噛むクセがあるのは自覚しているよね？ じゃあそこで一つ質問を上げるとすると新藤優はインターネットを好む。それはなぜか？ ネット内での出会いが面白いから好んでいるのかもしれない、それとも自分の知りたい情報が一度に大量に集めれるから好むのかもしれない、それとも一一という言葉在先頭に置くだけで多くの可能

性が生み出される。それをまた逆算する。ネットの出会いを好むという事にしといて、じゃあなぜ新藤優はネットの出会いを好むのか、なぜならそれは現実じゃ友達が少ないからネットの中だけでも友達を多く持ちたいと思っているから。じゃあまた逆算して、なんで新藤優には友達が少ないのか？ という事に至る。なぜならそれは新藤優という男がひねくれてて人が寄ってこないから。等の結論に至る。これは一例だから必ずしもこのような形になる訳じゃあないけれど。

どう？ 分かりやすかったでしょ」

「そうだな、腑に落ちない部分が多かったが分かりやすかったことに異論はない。だが、俺はネットでの出会いが好きだからインターネットをしている訳じゃないし、友達が少ないわけでもないし、俺はひねくれてない。俺は友達かはわからんが仲の良いと思っている奴は多いほうだと思うぞ？ 人並みにはだが」

「数えられるので何人？」

「2人」

「よくそれで多いと言えたわね……」

「え？ 多いほうじゃないの？」

「大違いにも程があるわ」

2人で少ない方なのか。初耳だ。

ええと、あのバカと……翔子？

「いいんだよ！ 数より質なんだよ！ あまり話さない奴らが多いより、よく話せる奴らが少ないほうがいいだろう？」

「そうね。数より質という考えは否定はしないわ」

意外にもすんなり通った。今までの付き合いだと反論される事の方が多かったのだが今回は正解したという事でいいのかな。何処か腑に落ちないがまあいいだろう。

「数より質という考えはどこから来たのかしらね」

「あ？ ……さあな、戦国時代とかの争いから来たんじゃないの」

「それなら古代ローマや中世ヨーロッパの戦争、宗教争いでもいいんじゃないかしら。単純な争いごとならそっちの方が多く、そして長くやってるんだから。そちらの方が妥当じゃないかしら？ 大昔の戦いでたしか何千何万という軍隊に対して三百だったかしら？ それくらいの戦士で戦い、大勝利を収めたという話を昔聞いた事があるわ。確かに戦国時代にもありそうだけどこっちの話のほうが信憑性あるとは思わない？ これこそ数より質を具現化したようなものでしょう？ 戦争もそうだけど食べ物とかでもあるわよね。例えば寿司なら、安いそこらのスーパーで売ってるようなパック寿司を食べるのは安上がりだし確かに美味しいけどたまには多少贅沢して一貫五百円とかする高級な寿司を食べるのもいいと思うの。まあ、私の味覚はおかしいのか知らないけどパック寿司も回転寿司でも本格的な寿司屋でも味の違いがわからないのだけどね。だってそうじゃない？ 赤身と大トロの違いぐらいは分かるけどサーモンの違いとか分かる？ 外見の違いなんてほんの小さいしモノ味なんて殆ど変わらないじゃない。なのに価格の違いは大きいのが理不尽すぎると思わない？」

途中までの会話は全然それっぽかったのに最後の寿司の流れでイメージが完璧に崩れていった

事に対して俺は責任者を呼びたい。責任者などいないがな。

ただ、寿司の味の違いがわからないってのは同感できる。俺も味の違いはわからん。ドコモ一緒だろあれ。

「しかしまあ、物事の逆算が哲学の一つって事はわかったよ。だけど哲学ってそれだけじゃないだろ？俺が前に調べたときの事思い出したんだけど、物事の存在とか消滅とかも哲学とかに入るんだろ？」

「難しい話はしないって初めに言ったでしょ？それにそんな事話したってあなたが完璧に理解できるとは思ってないし。それに哲学なんて無数のテーマがあるのよ？植物をテーマにしたものから宗教、食物、宇宙、歴史。それらいっぱい分岐点があって最終的な結末なんて逆算した人間と考え方の数だけあるのよ。いえ、むしろ結末なんてものではなくて、行けるところまで逆算して逆算してその人間が結末を創る。とある有名な哲学者は哲学の逆算を新たな道をつくる人間と例えたという話もあるの。新たな道をつくるけどその道はつくった本人しか通れないし入り口もわからない。たまには奇跡的に同じ入口から入る人間もいるけど同じ結末をつくる事は決してありえない。多少なりとも作者本人のねじ曲がった考えが出来るの」

なるほどな。どんなに同じ様に見えても本当はほんの少し、どこかが違う。それが何処かは他人も本人にもわからない。だが、何処か比べてみると違和感が残る。違和感というものが残るからこそそれは他人の作った道とは違う、その人自身が創りだしたオリジナルで自分だけの考え方というわけだ。その考え方と再び歩む人間が現れる事は後にも先にもないだろう。それがオリジナルであり、自分だけの道というものだ。

道が他人の足に踏まれたのならばそこはもう私道ではなく公道。多くの人間がその道を軸として私道——つまり新たな考えが生まれ、もしかしたらそこから現代の哲学者という物が生まれるかもしれない。

「哲学というのはその人の考えがどうであれ、その人の好奇心がどうであれ道は必ずできる。人間の格差とかそう言うのは哲学には関係ない。人間の想像と知識と探究心は皆平等。そういうところが哲学の良さであり、私が哲学にのめり込んだキッカケであり大好きになった理由」

満面の笑みでそう言われた。その笑顔は昔から見ていた。幼稚園、小学校、中学、高校と毎日とは言わないものの見てきた。そう考えると確かにコイツにファンが出来るのはわからない訳ではない。

俺が嫌がらせされて嘆いてる時。

俺が勉強教えてくれと土下座した時。

文面で見れば悪いイメージしか湧かないがこれが幼馴染という関係で創り上げてきた新藤優という男と萩原翔子という女の関係。俺が被害者になってあいつが笑う。そんな平凡で他人から見たらどうでもいい関係

そんな関係だからこそ今日見た笑顔は恥ずかしながら一番可愛かった。時には憎たらしい奴だけこの笑顔で今日の話は聞いててよかった気がする。いろいろな事も聞けてしな。

素直に言うと意外に面白かったよ。

「さて、そろそろ授業だからいくわ。優君も遅れないようにね、次は現国でしょ？遅刻すると

今度こそ単位取れなくなっちゃうわよ。それに今日は課題もあったはず。ちゃんとやってきたんでしょうね」

相変わらず自分以外のクラスの事までよく知っている奴だと感心してしまう。俺なんて自分のことすら手一杯、というか手も付けてないのに。

翔子はゆっくりと立ち上がると食堂の入り口まで歩く。そしてゆっくりと振り向いた。

「それと……ラーメン伸びてるよ」

ん？ ラーメン？

——ああああああああああああああああああ！！！！！！

声には出さなかったが心の奥底から甲子園のサイレン並の叫びを吐き出した気がする。そうだよ！ 哲学の話しててすっかり忘れてたわ！

変な関西弁が混じった叫びと共にテーブルの上にそしてさり気無く自陣へ戻ってきていたカップラーメンを仰ぎ見る。上に乗せていた割り箸をゆっくりとはずして蓋を開け……。

脱毛するレベル。いや脱帽か。ある意味奇跡体験アンビリバーボーだったよ。中の麺がスープをほとんど吸っていて約2倍に膨張していたんだ。何を言っているのかわからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかったでお馴染みのポルナレフが出てくることもなく俺の膨張してくれない小さな頭脳は答えを思考回路を寄り道することなく冷静にさばき出した。

——翔子だ。

あいつが俺に話しかけてくる所で怪しんだ俺は何処に行ったんだ！ ただただこいつが話をする為だけに俺に話しかける必要はなかった。あいつの交友関係なら俺以外にも好条件の奴は数えるほどいる。なら翔子が俺に話しかけてくる理由はひとつ……嫌がらせだろうな。

わざと長ったらしい話をして俺をカップ麺を翔子側に持って行き、カップラーメンから意識を外させて話をする。そうすれば俺の性格を分かり切っている奴だ、無理やり俺が取らない事を範疇に入れて会話していたんだろう。俺はこいつの掌の上で踊らされていたというわけだ。

ギギギッと錆びた歯車の様に首を曲げると入口付近で腹を抱えて笑っていた。クソムカつくが何時もみたいに追いかける事はしない。いや、嫌がらせの範疇を超えて圧倒的な手際の良さに対して脱帽していた。いや、帽子はかぶっていないがな。

翔子は俺に対してピースサインを向けると悠々とそして満足気に去っていった。

「ったくよ……。またしてやられたぜ。今日は昼飯抜きかぁ——ん？」

カップ麺の下に冷たくて固いの感触があった。カップをどけて見てみると下には五百円が挟まっていた。翔子がおいて行ったのか……？ そうだったら今回の事は不問にしよう。

そういえば翔子の嫌がらせがここまで手際の一よくなったのは初めてだ。今までなら多少無理矢理に、大胆に仕掛けてきたから俺も多少なりとも対処はできた。だが今回は俺が手を出す事もなく全てが全て気づく前に始まって終わっていた。

なぜそこまで今日は手の込んだというか本気を出したというか……。

翔子に教えてもらった哲学の逆算してみるか、なぜ今日俺に話しかけてきたのか、それは嫌がらせがしたかったから。じゃあなぜ今日の嫌がらせは手が込んでいたのか。それは分からん、俺達の関係の何時から始まって何時終わるのかもわかんねえよ。まず、俺達の関係って何だ？ そ

れは―――やめた。

このまま逆算を続けたら俺は俺の都合のいい様に解釈しちまう。そんなのはあまりにも一方的すぎて俺のプライドに反する。まずプライドがあるのかどうかも怪しいところだがな。

とりあえずこのカップ麺は食えたもんじゃないから、カップ麺の神に一礼と謝罪の言葉を申し、食堂のおばちゃんに頼んで捨ててもらおう。そして俺も健全な男子である以上昼飯抜きというのは応える訳で。翔子から貰った500円玉を使って昼飯を食おう。そして後でこの話をアイツにしよう、嫌がらせとして。

「おばちゃん――新鮮野菜ヘルシー定食一つ、トマト大盛りで頼むわ」